

支えとなった。来る日も来る日も、板切れにあてどのない嘆きを歌につらねては、硝子の破片を、消しゴムがわりに、消して書いては慰んだ。」過酷な抑留の日々を支えたのは短歌だったのだ。

・海へだてながく見ざりし父を戀ふ俘虜のわが身の何も無くなりて

「収容所雑詠 十四 ナホトカ港」より。飢餓、重労働、酷寒。人間から思考を奪い続けた日々。肉体的にも精神的にも人間を人間たらしめない日々、終わりが告げられる。

昭和二十三年六月、ナホトカ港より舞鶴へ帰還。シベリア抑留の日々は、大内からすべてのものを奪いとった。「わが身の何も無くなりて」はけして大げさな表現でも何でもなく、真実の思いであろう。これは何も大内個人の嘆きではない。少なくともシベリアで抑留を体験したすべての人に共通した思いではなかったか。

*

昭和六十一年、大内は第二歌集『海門の雲』を出す。昭和四十二年から五十八年までの作品一〇四四首を収めている。全体的に日常詠や旅行詠が多いのだが、時折、抑

留体験に関わる歌が出てくる。

・さまざまに戦友はふりラーゲルに生きのこり来し身をかなしまむ
・恥多くかさねきたりし俘虜の身の瘡くきやかに八月きたる

・白樺の林の奥の四百余体われら素掘りせし墓とは違ふ

・三十年過ぎてしまへり怨念の失せて悲しみのあはれ深まる
・坐睡せる夢にいできて悲しかり戦友もくもくと枕木を踏む

・凍りたる黒パン食みて折れし歯を雪の上
に吐き曳かれゆきしか

・上歯下歯四本のこりしわれの貌うつる鏡
にしばらく対ふ

ラーゲル（収容所）に生き残って来たわが身をかなしむと同時に、その抑留の日々を「恥」ととらえる複雑な胸中。生きるためには人間的な行為を行う余裕はなかった。「瘡」は肉体的なものというよりも精神的なものでろう。三首目は「残像 アン

ガラ会の墓参団が、三十年後の異国の丘に詣づるグラビアを見て」と題する連作中の一首。自分が埋めた仲間の墓を思う。夢に出てくる戦友。シベリア鉄道の枕木の一本

一本が、日本人の抑留者の死体であるといわれ方もする。大内は、シベリアの地に吐いた自らの折れた歯を思い、残った歯を通じて抑留の陰惨な日々を思い返す。

・気狂ひの歌など晒しどうなると詰め寄る妻に心は遠し

・生き恥を歌にさらすと罵るを一喝しふたたび小部屋に籠る

屈辱に満ちた抑留の日々を理解してくる人がいればよかったが、家族でさえも理解は困難だった。抑留された人間の気持ちは、当事者にしかわかりえない現実があった。「気狂ひの歌」とは実に痛烈な言葉だ。妻に「生き恥を歌に晒す」と罵られ、長年一緒に暮らしている妻にさえも理解してもらえない鬱然とした思いが結句の「心は遠し」に滲んでいる。自分の世界に閉じこもり、再び沈黙したのだ。

・口惜しさは耐ふるより無き俘虜の日に続きて永きわが精神史

冒頭に引いたこの歌に刻み込まれた大内の「口惜しさ」は、戦後七十年経った今でも我々が決して忘れてはならないものだ。